

みんなくのご先祖さま

著者	須藤 健一
ページ	2-2
発行年	2011-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10502/4907

みんなばくのご先祖さま

国立民族学博物館(みんなばく)初代館長の梅棹忠夫は、りっぱな博物館をつくり、後世の人びとから感謝される「ご先祖さまになろう」と創設期の教職員によびかけた。これは、新しいかたちの博物館をつくるにあたり、自らへの勇氣と館員の士気を鼓舞したことはである。卓抜な構想のもと、企画力、組織力、そして説得力をいかして、梅棹はみんなばくを世界一流の研究機関に育てあげた。

今回の特別展「ウメサオタダ才展」のねらいは、みんなばくの「創設者」、「研究経営者」、そして「未知への探究者」としての梅棹忠夫の「人と学問」をあらゆる視角から明らかにすることにある。

梅棹は、「生物学の研究者として人生のスタートをきり、生態学から民族学に目を転じ、さらに諸文明の比較というようなことを仕事にするようになった」と自身の研究を回顧している。また、この研究の根は山からはじまり、その原点は探検にあると述べている。京都の北山に昆虫を追い、植物を採集した中学時代、国内外で山を歩き、学術探検をおこなった第三高等学校と京都大学時代。この体験が、「自分の足で歩き、自分の目で見て、自分の頭で考え」、そして成果をだすという梅棹学問論の源となった。

本格的な学術探検は、一九四四年からの内モンゴル牧畜民の調査旅行で実践され、独創的な遊牧起源説を生みだした。一九五五年の京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検においては、アフガニスタンの山中にモンゴル人の末裔(モゴール族)を探し、その帰路、パキスタンと北インド横断の旅で見聞した「中洋」体験が「文明の生態史観」として結実する。

東南アジア、アフリカ、ヨーロッパなどの地域における研究でも学術探検の経験は発揮された。その成果は、女性論、知的生産の技術論、情報産業論、日本文化論や比較文明論などを展開させた梅棹の知の基盤となっている。とりわけ、「人間Ⅱ装置・制度系」の枠組みを柱とする文明論は、海外の学界に日本の人文社会科学の研究レベルを示すとともに高く評価された。

梅棹の学術探検、学問と思想はみんなばくづくりににおいても実践された。文明の生態史観は地域別の相対主義展示に、知的生産の技術論はモノにふれ、モノをつないで異文化を連想する構造展示に、そして情報産業論はビデオテープや情報の集積・整理・公開をおこなう情報研究センターの形成に、それぞれかたちをなしている。これが「梅棹のみんなばく、みんなばくの梅棹」といわれるゆえんである。

未知なるものにあこがれ、山に登り、世界の民族を訪ね歩いたみんなばくのご先祖さま、梅棹忠夫の偉業を、「ウメサオタダ才展」をとおしてより深く理解してくださいることを願うしだいである。

二〇二二年三月

須藤 健一

国立民族学博物館長